

ブータン王国の人と山

小方全弘



ブータン王国へ入った日本人は第二次大戦後だけでもおおよそ三十人を数えることができる。戦前の入国者は、多田等観師など数えるほどではない。

殆んど秘境がそうであるように、ブータンもやはりイギリス人によってその最初のレポートが紹介されている。一七七四年のジョージ・ボークルや一七八三年のサミュエル・ターナーがそれである。しかしこの両者はチベットへの使節として、ブータンを通過したにすぎない。だがターナーによって書かれた *An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama in Tibet* (London, 1784) 相当の頁をブータンのために費やしている。

私にとって特に印象深かったのは、その当時の首都であったプーナカのスケッチである。

まことに正確に描かれたそのスケッチは、一九五八年に戦後始めて正式にブータンを訪ねた中尾佐助さん（大阪府立大学教授）の写真と全く変わっていないことだった。その後、十九世紀になってイギリスはペンバートン使節としてブータンに送っている。その報告のプリント版が最近インドで、*Report on Booran* と題して売りに出されている。この報告はおそらくブータンについて詳述された最初のレポートであろう。非常に貴重なものであるがオリジナルは入手困難である。

中尾佐助さんによって書かれた「秘境ブー

タン」は、ブータンについて書かれた本では世界最高のものであろう。

それはさておき、中尾さんが一九五八年に入国したときのブータンと、私が入国した一九六八年とは大きな変化があった。おそらくはペンバートンと中尾さんの差より、むしろ私と中尾さんの差の方が大きいのではないかと思われるほどである。

*

いまブータン王国は大きく変化しようとしているといっても間違いはあるまい。南はドア・カーテンと呼ばれるジャングルに、北は世界の屋根と呼ばれるヒマラヤ山脈によってさえぎられているとはいえ、秘境ブータンにも文明の波が押し寄せ始めたといえよう。

西はカシミールから東はビルマ高原におよぶ二〇〇キロ以上の大ヒマラヤ山脈の南斜面の殆んどは人口過剰と食糧不足に悩まされている。自然環境のきびしさがそうさせている。ブータン王国は、その中において特別な存在である。人口は七十五万人から八十五万人くらいであろう。まだセンサスが行なわれたことがないのでくわしいことは判らな

い。ブータン政府の発表によると約八十五万人ということである。宗教はラマ教である。同じヒマラヤの王国でもネパールの主な宗教はヒンズーであり、この点でも特異な存在といえよう。世襲制の王国で、現シグミー・ドルジ・ウォンチュック国王は三代目である。初代国王はブムタン。二代国王はプーナカにそれぞれ居を構えていた。現国王はティンブ



ーに住んでいる。少なくとも、現在までは選都されている。皇太子はロンドンに留学中であるが、その住居はパロにある。あるいは四代の王城はパロに移るのだろうか。

面積約五万平方キロのこの小さな王国に住む人を紹介するのはなかなか難しい。大別すればいわゆるブータン人とネパール人の輸入労働者とに区別することもできようが、ここでは輸入労働者は除外して考えよう。いわゆるブータン人はドロツ（ク）・パと呼ばれている。チベット語で、「竜の人」の意である。ブータンの国旗は竜をあしらっており、ブータン人自身も竜の人であることに誇りを持っている。

ある日、私は生粋のブータン人に質問してみた。インドにはカースト制度があつて我々外国人にはその区別がつかないが、ブータンにもカースト制度があるのだろうか？ 私の質問に答えたブータン人は二十五歳で、中堅官吏とでもいえようか。しばらく考えた後で答えてくれた。インドのような厳しいカーストはありません。強いて挙げれば、第一はロイヤル・ファミリィで、二番目は私のようなブータン人。そして三番目は労働者でしょ

う」彼がインドのカーストをどのように理解しているのか知る由もないが、この答えはまさにブータン人の気質を表現して妙である。ブータンでは比較的身分制度が少ないといえそうだが。しかし、これが古い昔からそうであったとはいきれないようだ。ブータンにも屠殺を専業とする不可触賤民が存在していたことはよく知られている。近代教育を受けた現国王は、狩猟を好まれる。狩りのあと獲物の処分には屠殺を必要とする。そのため現国王は屠殺を専業とする人たちを重用した。彼らの中の秀れた者は高級官吏となり、今ではアンタツチャブルではなくなつた。これが、賢明な現国王の政治的配慮であつたかどうかは判らないが古くから伝わる悪弊は除くにはあるがその姿を消しつつあるようだ。

このことは、いまこそブータンを調べなければならぬということをわれわれに暗示している。

一般のブータン人は、まことに礼儀正しい。ブータン人の主な生業は農耕と牧畜である。主食は主に米飯であり、その米は彼らの需要を十分に満たし、余りはインドに輸出してい

る。そのため彼らの生活には貧しきを感じない。十年前にはなかったバザールも、いまではパロやティンブーには常時、商品が置かれインドからの輸入品もそろっている。電話も架設された。このように文明の波が押し寄せる中にあってもブータン人の生活はゆるぎもしない。私は十年前にネパールへ出かけた。そして十年後再びネパールを訪れてみた。ネパールは第二次大戦後まで厳しい鎖国政策をとっており、開国と同時にこの秘境へどつと外国人が押しかけた。それは全く外国人を知らなかったネパールの人たちにとっては驚きであつたにちがいない。いまではネパールの首都カトマンズには日本製の自動車が行きまわり、バザールには中共製の雑貨、日本製の電機製品、アメリカ製の煙草など、あらゆる商品が氾濫している。しかし一歩市民の生活の中に入ってみれば、そこは貧困に悩んでいる。ブータンは外観こそ豊かには見えないが一般庶民の生活は意外なほど豊かである。この豊かさがブータン人の礼儀正しきにつながるものなのかも知れない。

大体、ブータンの人たちは珍らしいものを欲しがらない。もちろん例外的なことにはな

いが一般的にはそういう傾向が強い。だから私のように、ひとりブータンの国を旅行する場合には不自由を感じる人が多い。その上、ブータンの男たちは人見知りをする。胸襟をひらけば底なしに親切であるが、それまでは取付き難い国民と誤りやすい。それに反して女性は明朗に見受けられる。通りすがりの旅行者には、ブータンでは男よりも女の方が威張っていると思われがちである。「男子の一言鋼鉄の如し」といった諺がブータンに生きている。この国では男が一度口にしたことは必ず守るといった風潮が強い。そのため男は発言するまでは非常に注意深い。その点、女は比較的無責任な立場にあり、本来陽気なチベット人の血を受けている彼女たちは思いきったことを平気で口にする。女の安請け合いを亭主がしぶい顔で尻ぬぐいをする光景を見つけることはこの国では容易である。いずれにせよブータンの人たちは魅力にあふれた人たちである。

* 一

ブータン王国の北に連なる高峯についてはくわしいことは判っていない。ブータン・ヒ

マラヤで最も有名なチョモラリ（七三二二メートル）は一九三七年イギリスのスペンサー・チャップマンによって登られている（という事になってきている）。この国の最高峯は従来クーラ・カンリだとされてきた。しかし一九五八年の中尾さんの探検によってクーラ・カンリは国境の北側、つまりチベット側の山であることが確認された。現在ブータンの最高峯はギャンケ・ブンツムといわれている。生憎、私はギャンケ・ブンツムを偵察する機会を持ってなかった。この山を見たブータンの人たちの話を総合すると上部は急な岩壁となっており、登攀は非常に困難だろうとのことである。

私がブータンに入った一九六八年の十月始め、東ヒマラヤ地方を襲った豪雨はブータンにも相当の被害を出した。私にとって致命傷となつたのは、この洪水で橋がとばされ、動きのとれなくなったことである。そのため私はこの絶好機に山の偵察を十分果たすことができなかった。私の唯一の機会はチョモラリ一山群へ出かけることだった。ブータンでの旅は自動車路のないところは馬を使うのが常識である。ブータンの馬は小柄だが山道では

めつぱう強い。急な下り道をのぞいては危険を感じたことはなかった。パロから三日間は、川にそって森林帯をゆるやかな登りである。四日目、その森林が突然開けるとそこはもう氷河の舌端である。僅かに見えるアルプスにはヤクが散見していた。本来なら山を眺めるにはもっとも良い季節なのだが、十月初旬の豪雨はヒマラヤでは雪となり、山頂は冬の粧いであった。深いラッセルにあえぎながら私はチョモラリー氷河を登った。

私の計画では始めチョモラリー氷河を登れるところまで登り、一度ベースキャンプまで下り、ヤレ・ラを越えてティンプーへ行くつもりであった。しかしその計画が不可能なことはすぐに判った。ヤレ・ラの方角は吹きだまりになっていて馬では越せないのは目に見えていたし、私には雪崩の危険さえ感じられた。止むなくチョモラリーの西の部分にその偵察の重点を置くことにした。何枚かの写真、それだけが私の成果である。

いままですべてのブータン政府は外国人の登山を正式に許したことはない。いつまでいまの状態が続くか予測はできないが、ブータン・ヒマラヤへ大手をふって出かける登山隊が現われ

るのはそんなに遠い将来ではないような気がする。すでにネパールでは地理的探検の時代は終わった。だが、ブータンの登山を志とするなら地理的探検から始めなければならぬ。事実、私はカラン教授の労作による地図を持参したが、山へ入ってからは全く用をなさなかったといっても過言ではない。西へ流れている川が、現地へ到着すると東へ流れているなど枚挙にいとまのないほどであった。といってカラン教授の地図を責めるつもりは少しもない。少ない資料の中からよくもこれだけのものを作ったと感心するほどである。ただ、クーラ・カンリがどうして完全にブータンの中におさまっているのか機会があれば

ブータン(Druk-Yul)。一六世紀以来の封建国。一七七四年いらいインドのイギリス勢力に侵入され、一九一〇年対外関係ではイギリスの指導をうけいれ、インドが独立するとあらためてインドから外交の指導をうけることとなった。政党はなく国王と首相がすべてを支配しているが、インド以外の国とは外交関係をもたない。ブータンの

聞きたいと思う。

おそらく次の機会を得たとき、私は再びカラン教授の地図を持って行くだろう。私の手に入る地図としてはこれしかないのだから。そしてその地図を修正するのも仕事のひとつになるにちがいない。

一九六八年の私のブータン旅行は失敗だった。しかし、この失敗を足がかりにして次の機会を待っている。多分、来年には出掛けることができるだろう。そしてその時こそはと心中に期するものがある。いずれにしても「ブータン王国の人と山」——与えられた題名を消化するほど私の旅はながくなかった。

(社団法人日本山岳会理事・大文31卒)

自主独立の動きの中心になっていたジグメ・ドルジ首相の暗殺事件が六四年におき中国、インド両国との関係が注目されている。第一次五カ年計画はインドの全面援助により道路建設が中心。米、大麦、小麦、とうもろこしなど、人口約八〇万を養うには十分であり、さらに鉱物資源、水力も豊富。インドの保護国。(編集部)

冬の知床岬

——一九六九・二・三——



大学山岳部

ハイ松帯となる。山容はお世辞にも立派とはいえないが、きびしい気象条件や、何分遠く離れた本邦唯一の原始境といわれるところが知床の魅力となっている。

土地の言葉でルシャモンと呼ばれる強風は想像を絶するものがあり、何千万吨もの流水を一夜にして視界のかなたに押しやってしまふ。漠然として判別しにくい地形を地図と磁石によってルートを求めてゆく事は登山の基本ではあるが、アルプスのな山になれたわれわれにとつてもの足りなさを感じた事は、事実である。

岳から始まり、遠音別(おんねべつ)岳を経て半島のほぼ中央に位置する羅臼(らうす)岳(二六六一メートル)につづいている。さらに羅臼岳から知床別岳まで一四〇〇から一五〇〇メートルの峰が続き、知床別岳より硫黄山(一五六二メートル)が西へ派生している。それより以東は高度二六〇メートルのルシャ乗越に落ちこみ、再びルシャ岳から一二〇〇メートルの知床台地に連なり、岬に向かって徐々に高度をおとしていく。高度は低いが、北緯四十四度ともなると、内地の三〇〇メートル級の山々に匹敵する気象条件となる。森林限界も八〇〇メートル位で、それより上は

知床半島は北海道の東端に位置し、オホーツク海へ北東に伸びる細長い半島である。つけ根の斜里町より岬まで約六五キロメートル幅はつけ根の部分で約三〇キロメートルである。ちっぼけな岬に山などあるのかと問われるが、れっきとした山脈が、海別(うなべつ)

われわれの計画は半島の東側の町羅臼よりルサ川まで海岸線を歩き、トッカリムイ岳(五六八メートル)から主稜線に登り、知床台地に荷物を集結して、順次テントをすずめて岬をアタックするというのである。アタックというものの今までの概念とはまったく違い、海拔〇メートルを攻略するのである。当然行きは良い良い帰りはつらいということになる。ここまですずめを前半とし岬のアタックを終了すれば、トッカリムイ岳より半島の付根の方にテントを進めて硫黄山をアタックする。準備の段階においても勝手知ったる北アル

プスの様なわけにはゆかず、トラック一つチャーターするにしても手紙の三つ四つは必要であった。切符もあらかじめ交通公社で特急券を予約し小口団体の申請をしなければならなかった。構成メンバーはは三年生三名、二年生三名、一年生六名、それに四年生二名を加えて総勢十四名。試験が終わって間もない二月十三日、五五〇キロの荷物を京都駅から一足先に根室標津(しべつ)に向けて送りだした。

荷物を出すまでの一週間ときたらもう忙しくてうかうかをきくと殺されるのではないかと思う程である。ある部員の言葉を借りる



なら、ネコの手どころかオバケの手でも借りたいという事になる。

二月二十一日京都を発ち夜の青函航路、明けて二十二日北海道の原野を特急おおぞらがつつ走る。昨日までの景色とはがらりと変わってほんとうに北海道を感じる。

根室標津に着いたのは夜になってからであった。荷物は無事着いていて喜びの再会をしたのはいいが、泊まる所に困って駅前の広場にテントを張る事にした。翌朝の温度は零下二十四度、根室標津の駅でこんな温度なら知床の山へ行ったら一体どうなるのかと一同びつくりする。

頼んでおいたトラックに荷物を積みこみいよいよ山に入る。右手はるかに国後が見える。想像していたよりはるかに大きな島だ。トラックはシヨージ河口まで入った。これから先は海岸線をルサ河口まで徒歩である。流水というのをはじめて見た。氷の概念とはかけ離れていてまるでデコボコしている。

二月二十四日晴。零下十四度。四名でトツカリムイ岳とルシャ岳との

コル(鞍部)まで偵察に行く。ルサ川を一時間程さか登ったところで尾根に取りつき、目印の赤旗を木に結びながらのラッセル。雪は案外少なかった。トツカリムイ岳まで登ると眼下に根室海峡が開け国後島はすぐそこに見える。その近さにはおどろいた。流水は海峡の半分位を埋めつくしていた。残りの部員は昨日のシヨージ河口まで荷物を回収に行く。

二十五日晴後曇。零下十四度。今日は偵察隊の四名がコルまでテントを持って登り、残りは荷あげである。偵察隊はかなりのアルバイトを強いられたためか、一年生はバテ気味、凍傷の気配がみられたので用心する。凍傷は火傷と違って感覚が無くなってくるので、自分で気が付かぬうちにどんどん進行する。常に注意をしなければならぬ。コルのテント地に着いた時はもう暗かった。緯度が高いだけに日照時間も短かく五時ともなると太陽は沈み暗くなってくる。これからの行動時間を考えねばならない。

二十六日曇。零下十四度。偵察隊はベースキャンプ予定地までのルート工作に行く。稜線に出るとルシャモン(強風のこと)に猛烈にたたかれた。竹竿をかついでいる二年生な

どはあっちへ行ったりこっちへ行ったり。手助けをしようと思っても風に向ってはとも歩けない。風速は瞬間にして四〇メートルはあったろう。みな必死の形相である。こんな風も不思議と帰途には大分おさまった。明日はみんなきつとびっくりするだろうな、一年生なんか飛ばされるのと違うか、とはなしていたが、その後こんな強風に見舞われることはなかった。偵察隊のなかに誰か精進の悪い奴がいたのだろう。まったくはた迷惑な。この一日で両方のほつべたに凍傷をつくる。行きは左側、帰りは右側、まるでピエロの様だ。

二十七日。零下十二度。九名がベースキャンプ入りする。出発の時ふっていた雪もやみ好天気となる。行手右には根室海峡をへだてて国後島がみえる。今日はほとんど流水が無い。左手にはオホーツク海、こちらは流水でピッシリ。わずかに幅一キロの水路がある。岬は見えないが見えぬあたりが岬だろう。前方やや右寄りに国後島の雄山チャチャヌブリ(一二二メートル)が白い姿を見せている。知床台地はやけに広く極地の雪原の様だ。今日是一日山を楽しむことができた。二十八日。雪後ガス(風強し)。きのう荷あげ隊が

デポジットした荷物を取りに行く。また荷あげ隊は今日ベースキャンプ入りである。天気はあまり良くなく、今日ベースに入る者は気の毒だ。どうせ下を向いて歩くのだから景色なんかは夢のうちだが。三月一日。ガス後晴。朝ガスがかかっている極端に視界が悪いせいか、第一キャンプ建設は見合わせて偵察隊を出した。十時頃から晴れてきたのだがもう遅い。晴天停滞も悪くならう。二日。ガス後晴零下十六度。昨日と同じ様な天気だ。ベースのテントを残して、第一キャンプとアタックキャンプは出発する。風は昨日よりも強く一向に晴れてくれない。ウイヌブリ岳(九九二メートル)の頂上直下に第一キャンプとアタックキャンプのテントを二張り張る。サポーター隊として行ったベースキャンプ隊は悪天候の中を帰途についた。また凍傷にかかったような感じである。

三日。ガス後晴。零下十九度。第一キャンプ隊とアタックキャンプ隊は、最終キャンプを建設することができた。連日天候にめぐまれて快調にテントをすめることができた。ついで四日は絶好のアタック日和である。おそらくアタックキャンプの連中は朝早くから岬

アタックにむかったことだろう。ベースキャンプ隊も第一キャンプまで顔を出して、帰りに知床岳(一二五四メートル)をきわめる。岬アタックのもようをアタック隊員の日記から抜ずいしよう。

*

無風、朝日が素晴らしい、国後上方に真赤な太陽が顔を出し、その光線が海を渡り、われわれのキャンプを照らしている。五時五十分、サポーター隊の後を追って出発。ポリモイ岳を国後側に巻き、次のピークをトラバース(横まき)気味に進む。ハイ松とのたたかである。サポーター隊に感謝。岬に近づくとつれ、両側の海はせばまり、緑が目につく。ただ国後側に大きな雪庇が張り出し、オホーツク海側をトラバース気味に樹木を抜って進む。サポーター隊のトレースどおりにちよつとしたナイフリッジを越えようと、岬を一望にできるジャンクション(尾根の合流点)に出る。少し行った所でサポーター隊と別れていよいよわれわれアタック隊だけになる。ここから一気に岬めがけて下ることになる。小さなピークが続き近い様でなかなか遠



い。ザイルを使用する必要はなく、少しオホーツクよりから雪面をグリセードで下る。海岸近くの樹林帯で重いラッセルを強いられるがワンピッチ奮闘すると突然前方が開けて明るくなる。海だ。いや一面真白の雪原である。暖かい、春の陽気に包まれて、岬に向う。十一時半、碑の前で感激の握手、海拔〇メートルへのアタック。山岳部としてピンとこない

がこれまた味がある。流水、番屋、いかにも北の果てという感がする。十二時出発。時間がないのが残念である。少し平坦な樹林帯を進むと顕著な尾根が真すぐのびている。今日中に帰幕できる目安がついたので気をよくして快適に飛ばす。最後のハイ松との闘いを終え、ポロモイを巻くと眼前にテントの薄明りを見る。時に午後六時十分。

五日。晴。アタックも成功したので、長居は無用である。さっそく下山にとりかかる。

六日。晴。零下十四度。これで前半を無事終了して最初のコルまでもどってきた。後半の硫黄山攻略は、前半とちがって上へ上へと登って行くのである。ここまでもどつてくると皆もう下山してしまいたい気分になるが、やはり初心忘れるべからず、最後まで気持ちをはきしめねばならない。コルの辺りは森林帯でモミの木が一面に生えている。カラスが群っている。やけにカラスの多いところだ。天然記念物のオジロワシはまだ一羽も見当たらない。ウサギはかなり大きいのがはねている。まだまだ動物の宝庫である。もっともクマなどあまり見たくもないが。

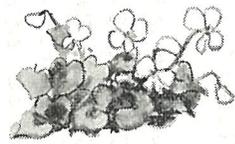
八日。晴。硫黄山アタックキャンプ建設に

向うが、予定より早く着いてしまったので、そのままアタックに行く。絶好の晴天である。三人のアタック隊は快調に飛ばして東岳の稜線にでる。硫黄山が眼前に飛び込んでくる。急だ。知床きつての鋭峰だけかなりルートもわるそうだ。知床別岳まで左右に海を見ながら歩く。海がテラテラ光っている。晴天だが風は強い。知床別から西へ廻り込んで、ヤセた稜線を行く。アイゼンが快適にきいてくれる。この稜線はナイフリッジで全然知床らしくない。二つの前衛峰の間から火口へちょっと下り正面をダイレクトに攀る。ザイルをつかったが、遠くから見ると単に頂上に立つことができた。頂上は又風が強いが風下側に十メートルも下るともうそこは別天地だ。十二時頃からガスがかかり始め視界も悪くなる。アタックも終り最高の気分である。もっと山にいたい様な下山したい様な、やっぱり山はいいな。知床、さいはての山々、国後が見える山、毎日海を、流水を見て歩いたっけ。二十日間全然他のパーティーに逢わなかった。知床ならではの事だろう。また機会があれば来てみたい。

(工学部四年生・土田雅章記)

スペインの大学生活

石橋 昌子



私がスペイン政府の招待留学生としてヨーロッパに渡ったのは、一九六五年九月下旬。スペインに二年、フランスに一年の留学生生活をおえ、このほど帰国するまでの三年余りは、日本への帰国を惜しく感じたほど充実した日々の中で、あっという間にすぎさってしまっ

た。ヨーロッパの中でも後進国といわれ、日本では闘牛とフラメンコでしか知られない、けれど古い文化と歴史を誇るスペインでの二年間を、彼らの生命力に富んだ陽気さと日本人に対する絶対的な好意、この国の持つ明るく、大ざっぱな雰囲気の中で、私はのびのびと学ぶことができた。

スペイン語とのたたかい

スペインの学年は十月中旬に始まり六月中旬に終わる。私は着いた翌日より国立マドリ

ド大学文学部外人コースに学んだ。

五年前に創立されたスペイン北部パンプロナ地方にある私立のナバラ大学（宗教団体の経営による）を除いて、スペインの大学は全て国立であり、それも一州に一つずつしかない。したがって首都マドリドにも高卒生を対象とする各種エンジニアや外交官など養成のための専門学校はいくつかあっても、大学と名のつくものはマドリド大学だけである。

マドリドの北西のはずれに広大な敷地を誇るこの大学内には、電車・バスが走り、学生たちをずつと離れて建つ各学部へ運んでいく。きれいに整備された真っ白の敷石道、あざやかな芝生のグリーン、全く広々としていて気持ちいい。春には桜に似たうすいピンク色のアーモンドの花が咲きそろう、遠い日本の桜の春をふとしのばせられたりした。

大学からマドリド市内へむかって東側一帯には、留学生やスペイン各地から来ている学生のための寮が建ち並び、大学を含めてこちら一帯はクシウダ・ウニベルシタリア（大学街）と呼ばれており、都心の騒音をはなれ、静かでアカデミックな雰囲気にも包まれている。

文学部に所属する外人コースには、共産圏の国を除いてほとんど世界各国からの留学生がやって来ている。スペイン語を母国語とする中南米の国々からの留学生もずい分いるが、彼らは経、法、医その他の学部に進んでいる。

外人コースはA、B二つのクラスに分かれ、ひとクラス二百人余り、女子学生が六十パーセントを占めていた。髪の色、肌の色の異なる若者たちがそれぞれのお好みみの服装で一室に会しているさまは壮観であった。

授業はだいたい朝九時に始まり、遅い日でも一時半には終わる。文学、歴史、地理、美術史、スペイン語文法などスペイン文化に関する講義を聞くわけであるが、教授の中にはこの国の人たちの癖で相当の早口で話す人もあり、私のようにスペイン語の未熟な者に

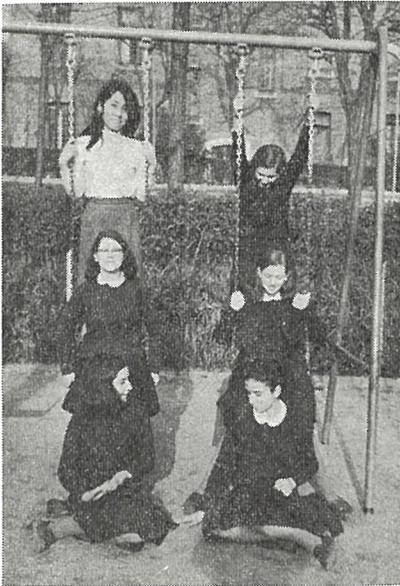
は、内容を理解するのが大変であった。スペイン語と同じラテン語から派生し、三者似通った言語を用いるフランス、イタリアの留学生たちは、この早口のスペイン語をほとんど苦しまずに理解しているようだった。また、他のヨーロッパ諸国やアメリカからの留学生に比べ、アルファベットを用いず全く異質の言語を使用する、われわれ日本人は、彼らとの間にあるハンディキャップに少なからず苦しめられた。ある日本人留学生が「ノートをとるのに、せめて彼らぐらい速く横文字が書けたら」と嘆いていたが、精いっぱい速度でノートをとっていても、書き終わらない内にどんだん次の話が始まり、聞き逃して、とびとびにしかノートがとれず、後で誰かに写させてもらわねばならなかった。

早くスペイン語に慣れなければ……と、夕方は国立の言語学校のスペイン語科に通ってもう一度文法をたたくこみ、日常生活においても新しく出くわした単語は食事の席であらうと、どこであらうとすぐその場で書きとめ、夜眠る前にベッドの中で覚えてしまおうようにした。間違いを気にしたり、恥ずかしくていたのでは話す方もなかなか上達しないの

で、会話の機会を多くつくるために勇気を出して自分からも人に話しかけるように努めた。そのかいあってか三、四ヵ月後にはクラスでも何とかがついて行けるようになったし、九ヵ月後の夏期外人コースでは、われわれ日本人留学生三人全員がコース末試験で受験科目全部で優格でパスし、周囲の人たちを驚かせた。一日中スペイン語、スペイン語で明け暮れる生活はきつく、夜になっても頭がカーとして寝つかれないこともあった。

寮と修道院

留学生を受け入れる寮の施設は比較的整っている。静かなシウダ・ウニベルシタリアには規模の異なる寮がたち並び、マドリド市内にも余り大きくはないがいくつもある。スペインはカトリックの国であり、教育に関するほとんどのことは、宗教関係者の手に委ねられている。これらの寮は全て宗教団体によって経営されていて、寮費は大体一ヵ月二万円弱、もち



修道院寄宿舎の友人と（左上が筆者）

ろん三食付きで、タンス・机・椅子・ベッドなど住むに必要な最少限度のものは備わっており、シーツ、タオルは与えられ、汚れると取り替えてくれる。

新学期の始まる直前に着いた私は、どの寮もすでに満員だったので大学からは遠くて通学に不便だけれど親切なスペイン人の家庭に下宿した。ここでは下宿代一ヵ月二万四千元で、二人部屋だった。留学生の中にはクペンシオンクといって、下宿屋といった感じのホテルの安物に住んでいるものも案外多かった。だいたい二人部屋で一日三百円ぐらい。

外食である。マドリド大学内に四棟続き（一棟三百人ほど入れる）の学生食堂があり、たつぷりと一と皿ずつ盛られた二種類のおかず、パン、デザート付きで九十円、栄養はたつぷりあるし、わりとおいしい。お昼になると学生の列が続く。男子学生などは時間的束縛の多い寮よりも、気ままにできるペンションに住み、学生食堂で食事をとるのを好むようになった。

スペイン人家庭に三ヵ月下宿した後、私はマドリドのセンターに近い修道院の経営する女学校の寄宿舎に特別に入れてもらった。この女学校には日本の小・中・高校にあたる広範囲の学年層の少女約四百人が学んでおり、寄宿舎は校舎と同じ建物の中であって、地方から来ている五十人ぐらゐの寄宿生の少女達と、同じく地方出身の五人の先生たち（もちろん独身女性）が寝起きしていた。全くそこに住む権利のない、その上、外国人である私が入れてもらえたのは、日本にある姉妹校に六年いらしたという、日本をこよなく愛し、日本人が大好きだとおっしゃる院長様のご親切にほかならなかった。

とはいうものの、なじみのない尼様の姿、

古くて暗い建物、裸電球の下がった殺風景な寄宿舎の部屋は人の住む所ではないような気がして、最初の間は、わびしかった。けれども、日がたつにつれて少女たちとの友情や尼様たちのご親切によって、彼女たちとの生活にとけこんでいけるようになり、スペインを離れるまでの二年近くをここで過したのである。

私は、寄宿舎の部屋から、一時、修道院の礼拝堂の上にある以前は病室だった大きな部屋に一人で住むことになった。静かに勉強できるようにという院長様の心づかいであったのだろう。ただ、人一倍こわがりの私は、夜十時半、食堂で晩ごはんを食べ終わって、懐中電灯を片手に、真っ暗な廊下をつき切り、キーキーと不気味な音をたてる礼拝堂に通じる木の階段を登って自分の部屋にもどるたびに寿命のちじまる思いをした。

スペイン人、特に若い人たちは夕方から夜にかけての時間を必ず外で過ごす。映画を観たり（テレビがもう一つ発展の途上にあり、まだまだ、映画は大きな需要を占めている）仲間同志で集まって唄ったり、踊ったり、喫

茶店でおしゃべりしたり。女の子の門限は、

普通十時（スペインの晩は十時から十一時である）、私と五人の先生も、十時五分前という厳しい寮の門限に、いつもあたふたと駆け込んだものである。一分でも遅れると、三重にある鉄の扉は、ピタッと閉ざされてしまった。夜九時を過ぎるとソワソワと腕時計に目をやり、落着かなくなるのが私たちの日課だった。

女学校の生徒のほとんどが、私の友人だったが、中でも寄宿生の日本の高校一年にあたる学年の六人グループは、私の大の仲良しであった。時間的束縛の厳しい寄宿生々活の中で、少しの自由時間を利用して、私が部屋にいろのがわかるととんで来た。そして日本のお話しをして欲しいとせがむ。天気のいい日曜日の午前中は、いつも彼女たちと庭でバスケットをしたり、ピンポンをして遊んだ。無邪気で明るく、礼儀正しかった。私がスペインを離れる時、いっしょについて行けない自分たちの身代りにと、お腹が突き出てユーモラスな、ヴァイキングのお人形をくれ、皆で「カヌート」と名づけた。このカヌートを見るたびに、彼女たちと過ごした日々の懐かしい思い出にひたっている。

スペインの若者たち

スペイン滞在二度目の秋を迎え、私は国立ジャーナリズム専門学校に入学した。クラスの間はスペイン人八〇%、中南米からの学生が二〇%。三年制で、一学年一クラス(三十五人)だけの少人数、入試は割合厳しいそうである。

フランコ將軍専制下という政治的な理由もあり、この国のジャーナリズムはあまり発達していない。テレビもやっと普及したといったところで、国営である。それゆえ、将来になう若いジャーナリストの養成が必要であり、この学校の三年間の課程をおえた学生たちは、好待遇で新聞社やテレビ局に迎えられ、私の親友であり、クラスメートだったマリは、昨年十九歳でこの学校を卒業し、日本では考えられない高給でテレビ局に迎えられ、ニュース担当の編集員として働いている。時間的にもとても楽とかで「仕事のあい間、マドリド大学で法学をやるつもりだ」と先日の便りで言っていた。ジャーナリストを志す女性は意外と多く、彼女たちはこの仕事を最も女性に適したものと考えているふうだ

った。

日本で新聞学を専攻したということで、聴講生として特別入学を許された私は、授業よりも、クラス仲間との交友を通して、いろいろのことを学んだ。彼ら若い世代の生活の中に入り込んで、彼らの青春の一端をのぞきみた。

一体に若者は陽気で、さばさばしている。スペイン人は情熱的であると、よく言われる。たしかに男性は若い女性とみるとすぐにデートに誘ったり、道を歩いていてもひっきりなしにスペイン名物の「ピロポ」(女性への甘い言葉)が投げかけられるけれど、それが少しも嫌味に感じない。彼らの表現が自然で素直なせいであらう。

国民の生活は相対的に豊かでないし、学生たちはお金を持っていない。けれど、彼らは青春を存分に謳歌しているといった感じである。仲間が集まると、一杯五十円のビール(スペインぶどう酒)を飲み、ギターをかきながら、唄い、その内体がムズムズしてきて踊り出す。彼らの体の中には、リズムが生きている。ギター、唄、踊りは彼らの生活に欠くべからざるものである。そこに居あわせた者同

志が、いつの間にか一緒に唄い、とけあっている。勉強のことも、不満を抱く政治のこともすっかり忘れ、音楽の世界に全てをゆだねて、楽しむ時は、皆で徹底的に楽しむ。そんな時彼らは底ぬけに明るい。

こんな彼らの国を「文明が遅れている」と片づけてしまう日本人によく出合ったが、文明国とは、人口が過密になり、拡大していく社会組織にふり回されてあくせく働き、欲求不満を抱えてイライラしている人間の住む世界を言うのなら、文明など余り進んでくれなくてもよいではないか。たしかに先進国に遅れはとっているけれども、やくざもいなければ、凶悪犯罪もない、貧しいけれど人間性豊かなスペインの価値を私は認めたい。

とは言うものの、スペインにも時代の嵐は吹き始めている。学生運動の激化、マドリド大学閉鎖のニュースをきくにつけ、心が痛む。一日も早く、あの広々とした大学内に、陽気な学生達の姿があふれる日が来ることを願っている。

(昭38大卒)

*

*

*